

哲學研究

第二百九十八號

第二十六卷
第一冊

アリストテレースに於ける可能概念の諸相

安藤孝行

我々が現前する存在を、單にその有るがままの姿に於て、直接無媒介的に直觀する限りでは、存在の様態といふものは問題にならない。この段階に於ては存在に對立する非存在もなければ、現在に對立する過去又は未來の觀念もない。非存在は存在の直接態の否定により、時間は現在の直接的靜止の否定によつて表象される。存在に對して非存在が定立され、現在が過去より未來へ向つて流れる時間の中に把へられる時、初めて存在の様態が現れる。茲に於て存在と非存在が時間を媒介として結合される形式が因果性に他ならない。因果の範疇によつて非存在に媒介された存在が現實存在となり、存在に媒介された非存在が可能存在となる。現實存在は非存在の中に可能存在を自己の母國として定立する。此事は換言すれば認識が現象の直觀から進んでその原因を思惟するに至る事に他ならない。我々が現在我々の前に存在する物が如何にして生じ來つたかを問ふ時、我々は現在の根據として過去に溯及する。此現前する存在

は前にはなかつたものである。前にはなかつたものが如何にして生じ來つたか。全くの無からは何ものも生ずる事は出来ない。隨て此存在は過去の中に何等かの形で既に潜在したと考へねばならぬ。過去は現在の存在を潛勢に於て含むところの非存在であつた。現實存在の原因は可能存在である。それは非存在の中に存する存在である。認識といふものは何等かの程度に於て存在に對する非存在、現在に對する過去未來を豫想し、隨て何等かの程度に於て現實存在に對立する可能存在を認めてゐる。唯之が明確な意識に達するには認識能力が可成の程度に成熟する事を要する。可能存在の認識は學的自覺にはじまり、可能性の認識は哲學的自覺にはじまる。ギリシヤに於て日常用語としてのデユナミスの概念は既にホメーロスの中に認めうる。然し哲學が學問一般から分離することなく、隨て學の自覺の未だ生じないソークラテース前の自然哲學者に於ては、事物の原理探究に際して潜在的に可能概念が働く以上にはその明かな哲學的概念としての表現をみない。我々は僅かにエレア派のヅエノンやソフィストに其萌芽を認めうるに止まる。可能性を哲學の問題として取上げたのは漸くプラトーン及びメガラ派のディオドロス・クロノスに初まり、その明確な概念規定はギリシヤ哲學の完成者としてアリストテレースに俟たねばならなかつた。

デユナミスと言ふ言葉はホメーロスに於ては主として體力を現し、歴史家に於ては考慮された外的權力或は戰鬥力を意味し、數學者に於ては證明に對して效果ある形象の特性を、醫學者に於ては醫藥の效力を、修辭學者に於ては言葉の意味を現し、又貨幣の價值を意味する事もある。^(一)自然哲學者の斷片の中に認められるデユナミスの概念も略之等の日常的用語法を出でない。加之このことはプラトーンに於てさへ妥當する。彼が可能性を認めるのは主として現象界に於てイデアを求める活動の要件として、主として實踐的な動機に發するものであつた。隨て其可能性の性格は傳承

的な用法に一致して實在的内在的な具體的能力を現す。而も我々はプラトーンに於ても未だ尙殆ど其概念の嚴密な定義や哲學的展開を認めえない。他方メガラ學派に於ては、エウクレイドスは可變性や多様性によつて善の存在を脅かされざらんが爲に、善は唯一不動であるとして、エレア派のパルメニデースの如く一切の運動變化を否定せんとする。ディオドロス・クロノスは之を承けて現象界に於ても可能性を否定し、現在又は未來に實在するところのものを以て存在であると考へる。彼は可能性の概念を取上げはしたが、それは直ちに領域的に現實存在の中に埋没されて其獨立性を喪失することになる。(11)

(11) South, *Étude sur le terme "éventuel" dans les dialogues de Platon* 1-70

(12) *Faust, Der Möglichkeitsgedanke*, I, 1-66

アリストテレースは之に反對して可能性の獨立的意味を強調するが、それはプラトーンの如く實踐的要求からではなく、寧ろ自然界及び人間界に於ける運動變化の説明として、更には進んで存在其者の根據としての可能性を要求するのである。可能の概念は理論的實踐的な基本概念としてアリストテレース哲學に於て極めて重要な意味を帯びるに至つた。茲に於て、其概念内容は微妙な分化發展を遂げ、或意味で極めて嚴密な規定を獲得すると共に、或意味では複雑多岐に互つて後世に幾多の難問を提出するに至つたのである。我々は可能性を現はす主要な概念としてのデュナミスに關する包括的敘説を既に形而上學の中最も初期に成つた部分とされてゐる第五卷(△)の第十二章に認めることが出来る。(13)之によればデュナミスとは第一に、他者又は他者としての其者の中に於ける運動(又は變化)(14)の原理であり第二には他者又は他者としての其者によつて運動變化させられる事の原理である。アリストテレースは更に或事をよ

く又は意思通りに達成する原理、或は斯くされる事の原理、及びそれによつて全然非受動的・非變化的であるか乃至は容易に悪き方へ變化しない所の習性 (εὐθεια) と言ふ諸意味を興へてゐるが、之等は畢竟第一及び第二の基本的な意味の修飾に過ぎない。

デュナミスの之等諸意味に對應して可能者 (τὸ δυνατόν) と不可能者 (τὸ ἀδύνατον) の諸意味が區別される。然し可能者と不可能者と言ふ概念には上述のデュナミスに即する事なき別種の意味が含まれる。即ちト・アデュナトンとは、その反對が必然的に眞であるもの、例へば對角線が邊によつて通約的である事は此意味に於て不可能者である。随つてト・デュナトンとはその反對が僞である事が必然的でないもの、例へば人間が坐つてゐると言ふ事の如きである。此意味に於て可能的であるものには、必然的に誤ではなきもの、眞であるもの、眞でありうるものが含まれる。(五) 以上はいはば論理的可能者であるが、之に類する幾何學的な用語としてのデュナミスは轉義によつて生じた同名異義語である。(六) 而して之等の論理的或は幾何學的な用法に於けるデュナトンはデュナミスの本來の意味に關りなきものであり、勝義のデュナミスは畢竟他者又は他者としての其者に於ける運動變化の原理と言ふ第一の意味に歸着すると説かれる。(七)

斯くの如く論理的又は數學的用法から區別された存在論的概念としてのデュナミスの定義は明かに傳統的な原本的能力概念に一致する。此定義を含む第五卷は必ずしも嚴密な哲學的概念の定義を目ざすものではなく日常的用語法を含めた一切の語義を輯録せるものであるが、デュナミスに關する此基本的な意味は單に先哲の臆説又は日常用語法の蒐集に止まるものではなく、嚴密な意味に於ける哲學的概念として肯定されてゐると解せざるをえない。而も之が單に初期の思想に屬して後に廢棄されたものでない事は、後期に屬する第九卷(θ)第一章に於て殆ど其儘の形で踏襲さ

れてゐる事實によつて明かである。然し乍ら其處では上記の定義をデユナミスの本來の意義である事を認め乍ら、「デユナミスやエネルギーは運動に關してのみ語られるものより廣義であるからこの勝義に於けるデユナミスの定義は所期の課題の解決に役立つまい」と言つてゐる。^(九)然らば此第九卷の主要課題たる、運動に關する事なきデユナミスとは右に述べられた論理的可能の事であらうか。なるほど第九卷第六章では無限とか空虚の如く單に可能的であつて決して現實的存在として獨立する事なきもの、換言すれば唯思惟に對してのみ可能的なものが認められて居る。^(一〇)然し乍ら同卷の主題となつてゐるのは斯の如き論理的可能ではなくして寧ろ人爲的な製作や自然的な生成の問題である。^(一一)隨て茲に運動に關する事なきデユナミスと言ふのは「運動がデユナミスに對する如く、實體は質料に對する。」^(一二)と言ふ命題の暗示する如く、形相に對する質料を意味するものであらう。然し乍ら質料が可能であり、形相が現實であるのは、單に之等が存在の構成概念として靜止的に併置される限りに於てではなく、兩者が發展と言ふ形に於て媒介される事によるものである。然るに發展は廣義に於ける運動の一種に他ならないから、^(一三)斯くの如きデユナミスの概念も畢竟勝義のデユナミスに歸着する他はない。アリストテレスのデユナミス概念が此原本の意味を離れて、屢論理的なデユナミスに接近する事は論旨の進行によつて漸次明かにする筈であるが、我々は差當り初期後期を通じて其本來の意味と解されたデユナミスの定義に即して分析に着手すべきであらう。

(三) Met. A, 12, 1019, a, 20.

(四) 運動 (*κίνησις*) とは可能的なものたる限りに於ける可能的な者 (*τὸ δυνατόν*) の實現 (*ἐπιπέτεια*) と定義せられ。 (Phys. I, 1, 201, a, 10; 6, 4; I, 2, 202, 6, 7; 0, 1, 251, a 9; Met. K, 9, 1065, b, 16; 33, &c.) 廣義に於ては實現は運動を含むが、

狹義に於ては運動は可能性の面からみられた實現、或は可能性を含む實現として區別される。運動は自己以外に目的を持つが、實現は既に目的を完全に自己の中に現はして居る。その限りに於てそれは完成 (*entelecheia*) である。一例を挙げれば知識を目的とする學習、健康を目的とする治療は運動であるが、見る事、知る事、生きる事、幸せである事は實現或は完成である。運動と實現の相即と言ふ事も一面の真理であるが、(田邊先生「哲學と科學との間」二〇〇頁参照) 分析的なアリストテレースに於ては同時に兩概念を種的外延的に區別してゐる事も否定出来ない。運動と變化については、廣義に於ける變化 (*metabole*) には實體に關する生滅 (*genesis kai ophos*)、量に關する増減 (*aitesis kai olas*)、質に關する變質 (*diakinesis*)、場所に關する移動 (*topos*) の四種がある。この中で生滅を除いた三種の變化が運動と呼ばれぬ。(Phys. I, 1, 225, a, 34) 隨つて *kyklos* の定義に於ける運動變化は時には變化の一概念に要約される事がある。(e. g. Met. 9, 1, 1046, a, 9; 15) 然しこの區別は相對的であり時には運動は全然變化と同義語として用ひられぬ。(Phys. I, 1, 201 a, 9; A, 10, 218 b, 18; cf. Zeller, Ph. d. Gr. II, 2, 389 ff.)

(五) Met. Δ, 12, 1019, b, 19-33, それは正方形の邊又は平方根を意味する。斯く云はれる所以はそれの自乗によつて正方形をつくることが可能であるからである。

(六) Metier は勝義のデミナミスに關りなきデミナトンを幾何學的なものに限るが之は當らない。アリストテレースのデミナミスは實在的可能から論理的的可能に移行し、後者は前者を豫想する事は事實であるが、此推移と媒介はアリストテレースの自覺には現れずである (cf. Maier, Syllogistik des Aristoteles I 194) 又論理的的可能と幾何學的的可能は同一視されぬ。(cf. 1019, b, 30-35. Faust, op. cit. I, 191. NB. 2)

(七) *ibid*

(八) Met. 9, 1, 1046, a, 9 ff.

(九) *ibid.* 1045, b, 36.

(一〇) Met. 9, 6, 1048, b, 14.

(11) Met. 9, 6-10.

(111) Met. 9, 6, 1048, b, 6; cf. 9, 8, 1050, a, 15.

(113) 註(四)参照。

前述の定義に於て先づ注意すべき點は他者又は他者としての其者と言ふ表現である。之を單に他者としての他者と讀むベツカー版の校訂は却て其眞意を見失はしめる。^(一四)即ち右の定義の説明として「例へば建築術は建築される物の中に存せざる能力であるが、醫術は能力であつても醫される者の中にでも存しうる。然し醫される者としての彼の中にはなくして、醫す者としての彼の中に存するのである」と言ふ言葉の示してゐる如く、能力は建築術の如く單に他者としての他者、即ち存在的にも概念的にも關りなき他者に内在するものに止まらず、概念的には他者であり乍ら存在的には同一者である場合も認められるからである。他者としての其者に於ける運動の原理とは自己としての自己に於ける運動の原理たる本性 (Súvax) ^(一五)に對し、後者が即自的に一なる者に於ける原理であるのに對して附帶的 (κατά αὐτοβελόνος) ^(一六)に一なる者に於ける原理を意味する。いづれにしてもデュナミスは本性と異つて他者性を豫想する。而も此事たるや結果が原因を豫想する事の必然的歸結に他ならない。アリストテレス自ら認める如く凡て結果は原因を有する*。然るに原因は事實的に他者である事もあれば、意味的に別でありつつ事實的に同一者としての統一を保つてゐる事もある。前者は端的な他動關係であり、後者は或意味に於ける自動運動にみられる。尤も本性による純粹な自動運動に於ては、運動の原理は之の内在する所の存在の本質の中に含まれ、兩概念の關係は附帶的ではなくして即自的である。然し乍ら茲に於てさへ嚴密に考へれば動かす者と動かされる者の間には何等かの原理的な差別がなければ

ばならない。自己が自己を動かすとは自己が能動者と受動者に分たれる事、逆に言へば動かす者と動かされる者が存
在的に合一してゐる特殊の場合にすぎない。「渾一的なものたる限りに於ては自己が自己から働を受ける事はない。

何故ならばそれは同一であつて他ではないからである。⁽¹¹⁷⁾ アリストテレスの神は第一原因であり、一切の運動變化

の原理ではあるが、純一的な存在であるから自らは動く事がない。⁽¹¹⁸⁾ 神は運動の原理の原理とも言ふべき完成的形相で
あり、それが他者を動かすのは他者によつて愛される事による。⁽¹¹⁹⁾ 之に反して人間は體と心との二要素から成る事によ

つて自動運動をなす。蓋し「運動する單一者といふものをどう考へたらよいか。また部分なく差別なくして何によ
つて又如何にして動くのであるか。實に若しそれが動かし又動かされる者であるならば差別がなければならぬ」⁽¹²¹⁾ 自

己の中の一部分が他の部分を動かす事によつてのみ自己は運動する事が出来よう。純粹な自動であるところの本性に
よる運動でさへ、デユナミスと同じ類に屬するものとして、或意味でデユナミスであることさへ言はれ、自然的生成が

技術的製作と並んでデユナミスからの發展として説かれるのは、本性に於ける運動原理の即自性が絶対的自同ではな
くして或意味での差別分離を容れる爲に他ならない。アリストテレスは即自性と附帶性を分つのみならず、即自的
附帶性と云ふ逆説的概念を認めてゐるが、本性に於ける運動原理の存在形式はこの即自的附帶性に他ならぬ。⁽¹²³⁾

(117) Met. A, 12, 1019, a, 15: ἀφ' ἑαυτῶν κινήσαντες ἢ μεταβολᾶντες ἢ ἐν ἑτέροισιν ἢ ἐξ ἑτέρων [?] ἢ ἐξ ἑσῶν. 此校訂の理由は、ἢ ἐξ ἑσῶν (ἢ ἡλίων) とならざるに ἢ ἐξ ἑσῶν (ἡλίων) と解することの表現上の不自然感に基くものである。

(118) Phys. B, 1, 192, b, 21, 13; A, 254, b, 17; De Cael. 2, 268, b, 16; Met. A, 4, 1015, a, 14; 1014, b, 19.

(119) Phys. B, 1, 191, b, 23.

(1 卅) Met. 0, 1, 1046, a, 28: τὸ ἢ συμμετρικόν, οὐδὲν πάσχει αὐτὸ ὑπὲρ ἑαυτοῦ· ἐν γὰρ καὶ οὐκ ἄλλο.

(1 卌) Met. K, 7, 1054, a, 37; A, 7, 1072, a, 20; De Cael. 1, 279, a, 32. Phys. 0, 6, 259, a, 14.

(1 九五) Met. A, 7, 1072, b, 27.

(1 〇) Met. A, 7, 1072, b, 3.

(1 1 1) De An. A, 4, 403, a, 1. πῶς γὰρ ἰσὴ νοῦται ἡμεῖς κινουμένην, καὶ ἰσὴ τίνος, καὶ πῶς, ἀμείβῃ καὶ ἀδωροῦσιν; εἰ γὰρ ἐστὶ κινήσει καὶ κινήσει, ἀσπασθὲν ἐν αἰετῷ.

(1 1 1 1) Met. 0, 8, 1049, b, 5: λέγεται δὲ ὀρθήσας αὐ μόνον τῆς ἀπαιτήσεως ἢ λέγεται ἀπὸ τῆς μεταβολήσεως ἐν ἄλλῳ ἢ ἢ ἄλλο, ἀλλὰ ἵσως πάσας ἀπὸ τῆς κινήσεως ἢ ἰσότησεως, καὶ γὰρ ἡ φύσις ἐν ταύτῃ [ἐγείρεται ἐν ταύτῃ γὰρ] γένοιτο ἢ ὀρθήσας ἀπὸ τῆς κινήσεως, ἀλλὰ οὐκ ἐν ἄλλῳ ἀλλὰ ἐν αὐτῇ ἢ αὐτῷ.

(1 1 1 1 1) Met. A, 30, 1025, a, 130: λέγεται δὲ καὶ ἄλλως συμμετρικός, οὗτον ὅσα ὑμῶνται ἐκαστῷ καὶ αὐτὸ μὴ ἐν τῇ οὐσίᾳ ὄντα, οὗτον τῷ ἑαυτῷ τὸ ὅσο ὀρθῶς ἔχεται. 三角形である事は全然自體的であるが、その内角の和が二直角である事は三角形として自體的附帶性である。之を人について言へば、人が人たる事は自體的であるのに、人が男又は女として生殖能力を持つ如きは自體的附帶性を形成する。Met. M, 3, 1078, a, 5: πάλιν δὲ συμμετρικὴ καὶ αὐτὴ τῶς ἀπαιτήσεως ἢ ἐκαστον ὑμῶνται τῶν τανύτων, ἐστὶ καὶ ἢ ἐστὶν τὸ ἴσον καὶ ἢ ἀπεν, ἴσα πάλιν ἐστὶν (καταίαι οὐκ ἐστὶν τὸ ἐστὶν οὐδὲ ἀπεν, κελιοποιημένων τῶν ἴσων) 又火が火である事は自體的であるが、それが上昇する事は火である限りに於てではなくして火が軽きものたる限りに於てであるから、その意味では附帶的である。而も火は常に軽きものである限りそれは自體的である。隨て火が上昇するのは火の本性に基くものである。而して火の上昇する本性は又火のデユナミスと呼ばれる。(Phys. 0, 4, 255, a, 32.)

* Met. Γ, 7, 1032, a, 13; B, 4, 999, b, 7; H, 8, 1049, b, 25; Rhetic. A, 7, 1354, a, 11 &c.

斯くて他者性は嚴密な意味に於ては本性をも含めた一切の運動原理、或は少くともデユナミス一般の必然的契機であるが、此基礎としての他者存在はデユナミスの基本的な二種であるところの能動的デユナミスと受動的デユナミス

を分つ要件でもある。即ちデユナミスの此兩種はそれが同一の形相に關り其實現が同一である限りに於ては同一であるが、^(二四)一は能動者に、他は受動者に内在する點に於て相違する。^(二五)然るに能動者とは動力因であり、受動者とは質料因であるから、能力は動力因に於ける、受動性は質料因に於ける運動の原理と言へよう。^(二七)

然るにこの動力因と質料因とはそれ自體は現實的存在でなければならぬ。^(二八)先づ動力因について言へば「能動者は單に概念的ではなく、時間的に先に存在する。」^(二九)「生起するものは凡て現實的に存在するものから生ずる。」^(三〇)例へば「個別的人間は個別的人間によつて生まれるのである。」^(三一)質料因についても、一切の生成の根源であるところの第一質料は單なる可能存在であつて何等現實的存在性をもたぬものと考へられるけれども、それは唯極限概念としてのみ認められるものであつて、^(三二)具體的には性質的量的場所的の運動は言ふに及ばず、實體の生成に於てさへ基礎は單なる第一質料として先在するのではなく、或現實存在として先行し、或實體の生成は他の實體の消滅と伴ふものである。^(三四)

然し乍ら動力因や質料因がそれ自體として現實存在であると共に、之等の中に内在する他者としての二種の運動原理は、飽く迄デユナミスとしての共通性を持つ事が認められねばならない。常套的理解に於ては屢々、動力因は端的に現實的であり、質料因は端的に可能的であると解され、デユナミスは單に質料因に配され、動力因にはエネルギーが配されるのであるが、^(三五)動力因に於ける動力は却てデユナミスであり、質料因は又それ自體としてみれば現實存在たる一面を有する。動力因に於ける動力或は能力は假令形相と呼ばれようとも、それは能動的ではあるが文字通り可能

存在であると考へねばならぬ。神が能力或は能動性を持たぬのもこの故に他ならない。(三七) 此事は「質料はデュナミスであり、形相はエンテレケイアである。そしてエンテレケイアは二様であり、一は知識の如く、他は観想の如くである。」(三八)と言ふ如く、現に働いてゐない知識をも質料に對する形相としては、完成の中に數へ乍ら、「知識を學んでゐる者と、既にそれを持つてゐ乍ら観想してゐない者とは異つた意味で可能的である」(三九)と言つて、同じく働いてゐない知識をデュナミスに入れる事によつて裏書される。それは單に可能と現實が相對的概念であつて、或ものに關して現實的なものは、他のものに對して可能的であると言ふに止まらず、能力の現實存在に於ける内在性と可能及現實の概念の二義性を示すものと解せられねばならない。即ち斯る能力が現實的と呼ばれるのは、現實存在と言ふ意味ではなく、寧ろ現實存在をして現實存在たらしめる原理として、現實性を意味するものなのである。それは事物が「それによつて正に此物と言はれる所のものなる形態及形相」(四一)であることによつて現實的と呼ばれるのである。隨て原理としての自然とこの原理を擔ふ具體的存在としての自然存在とが分たれる如き意味に於ては、嚴密には現實性は現實存在から區別されねばならない。(四二) 前者は觀念的現實性であり、後者は實在的現實である。

斯の如く自己に對應した質料を伴はぬ形相、即ち銅と結付く以前の單なる工人の表象としての形態や、卵子と合體する以前の精子に内在する人間は、單なる現實性であつても實在としては寧ろ可能存在である。此事は「精子や果實は可能的に斯々の物である。」(四三)とか「作品は或意味で現實的な作者である。何故ならば彼が可能的である所のそのものを作品は現實的に現すからである。」(四四)と言ふ言葉にも窺はれよう。質料が可能的であり、形相が現實的であると云ふ事はアリストテレスの屢説する所であるが、此際の可能はデュナミスの第二義に限られる。(四五)

事は質料に屬し、動かし能動することは他のデユナミスに屬する^(四六)と言ふ命題は此能動性を有する形相が具體的な個物主義の立場からすれば未だ可能的存在に止まる事を現す動かすべからざる證據であらう。

工人の表象としての家や種子の中にある樹の形相はそれが表象であり種子である限り、未だ現實的に家や樹ではなく質料とは異つた意味で可能存在である。之等は動力因として時間的に家や樹に先行するのに、現實存在は目的であるから寧ろ結果に於て存するものである。如何にも「形相及び形相と質料の兩者より成るものが若し獨立的に存在するならば現實的である」であらう^(四七)。然し乍ら形相の離在と言ふ事は神や能動的理性の如きを除く一般の事物に就ては

否定される所であつてみれば^(四八)、此事は形相が現實存在である事を證するに何程の力をも持ちえない。觀念が單に觀念

に止まれば觀念的現實性は靜的でありうる。然し「永遠的なもの（即ち觀念的存在）に於てはありうるものと現實にありうるものとは同一である」^(四九)と云ふアリストテレスの言葉を裏から言へば、觀念的現實性とは單なる觀念的可能性以上の何ものでもない。然るに觀念が單に觀念に止まらずして質料に働きかける事によつて實在的現實存在を形成

する際には、形相が現實性の原理である以上、それは質料と異つて能動的であり、之こそ正に能動的可能或は能力としてデユナミスの第一義をなすものに他ならない。

現實存在を現實存在たらしめる現實性の原理が可能存在であるといふ事は、それ自體は不定的一般的な質料が個別化の原理であると同様であつて、形相と質料は現實存在の契機として別々に考へられた限り共に可能存在に止まる。

現實存在は個物であつて、單なる形相でないと言ふ事はアリストテレスの根本思想であるが^(五〇)、現實性と現實存在の間に明確な概念的區別を立てなかつた事が稍もすれば此個物主義を不明瞭にし、ひいては現實性としての形相の存在

的可能性を看過せしめる原因である。現實性の原理が可能存在であると言ふ此逆説的性格を認めねば、所謂形相は單なる靜止の原理であり、運動は發展に非ずしてイデアの墮在たらざるをえない事となる。(五一) プラトーンのイデアは一切の運動に先立つて超越的に現實性を持つ。然し個別的な存在がイデアを求めて之に高まる過程に於て働く形相は可能態から現實態に高まるものでなければならぬ。アリストテレースは形相の超越的現實性を認めない譯ではないが、其主要關心は個物の運動變化に存した。斯かる個物主義に於ては形相は質料と結合する事によつて不純にされるのではなく、之をまつて初めて自己の完全な存在性を獲得するのである。

(一四) Phys. I, 3, 202, a, 13-21; Met. K, 9, 1056, a, 28-34; De An. I, 2, 426, a, 15-17.

(一五) Met. 9, 1046, a, 20-28.

(一六) De Gen. et Corr. A 7, 324, b, 13; ἐστὶ δὲ τὸ ποικιλιῶν αἴτιον ὡς ἴσεν ἡ ἀρχὴ τῆς κινήσεως. cf. Bümmker, Problem der Materie &c. 224.

(一七) ibid, 18: ἡ δ' ἄν κινήσεως.

(一八) Met. I, 1, 1052, b, 9-14; A 5, 1071, a, 17-24; A, 6, 1071, b, 28; De An. I, 7, 432, a, 2.

(一九) Part. An. A, 1, 640, a, 24: ... εἴτα ἔτι τὸ ποικίλων ποσέστων ὑπερῆεν οὐ μόνον τῶ ἰστέῳ ἀλλὰ καὶ τῶ ἁρόνῳ ἴσων τῶ ὀνδρατος ὀνδρατος, κτλ.

(二〇) De Gen An. B, 1, 734, b, 21; Met. 9, 8, 1049, b, 24.

(二一) Part. An. A, 640, a, 25; Met. Z, 7, 1032, a, 25; 1033, b, 32; 8, 1049, b, 25; A, 3, 1070, a, 8; 28; 4, 1070, b, 31; 34; N, 5, 1092, a, 16; Phys. B, 1, 193, b, 8; 12; 2, 194 b, 13; &c.

(二二) Met. 9, 7, 1049, a, 26.

im ersten Sinne ist das Eidos „reine Energeia,“ im letzteren der konkrete Einzelfall.... Sie verhalten sich innerhalb eines begrenzten Werteprozesses wie Anfang und Ende des Werdens; und zwar entsprechend der Doppelbedeutung der Energeia so, dass diese als treibende Kraft schon in der Potenz vorausgesetzt, als verwirklichte Form aber erst im Endstadium vorhanden ist.

(四一) De An. I, 4, 429, b, 10: ἐπεὶ ὁ ἄλλο ἐστὶ τὸ μετέσθαι καὶ τὸ μετέσθαι εἶναι καὶ ὄνομα καὶ ὄνομα εἶναι καὶ πᾶ.

(四二) De An. B, 1, 412, b, 27: τὸ δὲ σπέσμα καὶ ὁ κενόν τὸ ἐνδέχεται τοῦτο σάμα. Part. An. A, 1, 641, b, 36. cf. Bz Index Arist. 692, b, 16 ff.

(四三) Eth. Nic. A, 7, 1168, a, 7 ἐνεργεῖα δὲ ὁ ποιησῶν τὸ ἐργον ἐστὶ πνεῦμα... ὃ γὰρ ἐστὶ ἐνδέχεται, τὸ τὸ ἐνεργεῖα τὸ ἐργον μὴ εἶναι.

(四四) De Gen. et Corr. A, 7, 324, b, 18; Meteor. A, 10, 388, a, 21; A, 11, 389, a, 30; A, 2, 339, a, 29.

(四五) De Gen. et Corr. B, 9, 335, b, 30: τῆς μὲν γὰρ ὕλης τὸ κινεῖσθαι ἐστὶ καὶ τὸ κινεῖσθαι, τὸ δὲ κινεῖσθαι καὶ τὸ κινεῖσθαι ἐπέσθαι ἐνδέχεται... ἐπὶ καὶ ἐπὶ τῶν ἐφ' ἧν καὶ ἐπὶ τῶν φύσει γινώσκοντων. Cf. Met. A, 12, 1019, a, 15-23; A, 15, 1021, a, 15; 0, 1, 1046, a, 9-13; 19; Ross' Comm. on Met. II, 240f.

(四六) Met. A, 5, 1071, a, 8; De An. I, 7, 431, A, 2

(四七) Met. A, 3, 1070, a, 13.

(四八) Phys. I, 4, 203, b, 30.

(四九) Space, A Critical History of Greek Philosophy. 267, Ross' Comm. on Met. I. CXV-CXIX.

(五〇) Platon, Timaeus 51D-52C; Met A, 7, 988, a, 34-b, 4.

動力因は製作に於ては技術又は技術家であり、^(五二) 自然的生成に於ては父親又は精子と^(五三) されるが、^(五四) 動力因が現實的であると言はれる時、^(五五) 我々はそれが動力因の如何なる契機に述語されてゐるかと言ふ省察を劣つてはならない。何故なら

ばアリストテレスに於てはその意味は區々であつて、必ずしも一貫してはゐないからである。第一に技術が技術として、技術家が技術家として、又父親や精子等が夫々其者として現實的存在である事は言ふ迄もない。次に技術の内容をなす形相例へば建築術に於ける家の形相の如き、或は精子に内在する人間の形相が結果を現實存在たらしめる原理として現實的と呼ばれ乍ら、純粹な發展の思想に於ては能動的なデュナミスである事は上述の通である。我々は上記の引用の他に「精子は技術から生ずるものの如くに作り出す。何故ならばそれは形相を可能的に持つからである」とか「例へば土は可能的に人であるか、否寧ろそれが精子になつた時にさうである」とか其他之に類する幾多の例證に事缺がない。然し最後に父親と技術家については、父親は父親としてのみならず人としても現實的であり、其意味で技術家が製作物としては現實的でないのと區別され、茲から自然的生成に於ては動力因と形相因と目的因とが一致するのに製作に於ては之が分離すると言ふ區別が立てられるのである。然し乍ら技術家に内在する技術は、技術家が現實的な製作によつて獲得したものであるから、建築術が建築より生ずる事、恰も精子が人から生ずるに等しいと言へやう。而も勝義の動力因としては「常に最も近きものを求めねばならぬ。∴例へば人は建築家であるから建築し、建築家は建築術によつて建築をする。だからこの原因（建築術）がより先であり、凡てのものに就ても同様である」。(六〇)勝義の動力因は直接的な先行原因であるから、建築術が建築物の動力因である如き意味に於ては人の動力因も亦、人或は父親ではなくして精子であり、父親や人が其動力因であるのは建築家や建築が建築物の動力因である如き間接的な意味に解さるべきであらう。實に「或意味で健康は健康から生じ、家は家から生ずる」と言ふ言葉の如きは彼の常套語たる人が人を生むと言ふ命題と並行して兩種の運動の構造上の一致を物語るものである。(六一)

斯くて製作と自然的生成の相異は上例に就て言へば、人と父親とが存在的に一であるのに、建築と建築家が存在的に他者である事である。建築家は存在的には寧ろ人と同一であり、建築術は彼の他者としての自己に附帶的に内在するところの運動原理として、人が人を生む本性的生成に對立する。然し乍ら此相異は動力因の意味に就て何等本質的な相異を生ずるものではない。一般に動力因が現實存在であるのは能力又は動力としてではなく、之を擔ふ基體としてであり、之に對して能力は現實性の原理ではあるが、それが動力因に内在して時間的に先行するものである限り、換言すれば精子に於ける人であり、建築術に於ける建築物である限り、未だ現實存在ではなくして唯能動的デユナミスに過ぎない。受精によつて人が發生し、建築活動によつて建築物が完成するのは、卵子や木材の如き質料の受動的可能的實現發展であるのみならず、同時に又精子や建築術に於ける能動的可能的實現であり發展であると云はねばならぬ。(六三)

質料因に於ける運動原理がデユナミスである事に就ては誤解の餘地はない。然し茲には動力因と能動的デユナミスに於けるとは逆の誤解が生じうる。即ち前者に於ては能力のデユナミス性が見失はれてエネルギーと解されたのに對し、茲では質料因が端的にデユナミスとされて之の有する現實性が看過され勝ちである。然るに質料因は受動的可能性を自己の中に有する現實的存在であつて單なるデユナミスにつきない。而して質料を可能性と區別するものは質料に於ける基體性である。

基體性と可能性は一方性と兩方性、持続性と變易性の二つの點に於て區別される所の質料に於ける二つの契機である。即ち第一に質料は基體に關しては一であるが、可能性に關しては他である。基體としては同一である銅は、アポロ

イン像やヘルメース像の如き多くの可能性を含む。隨て銅である事と可能的な像である事とが區別されるのである。人間は病氣になる事も健康になる事もある。隨て健康及病氣の受動的 가능성は同一の基體としての人間に内在する。

その限りに於て質料は兩方向的 가능성を持つ。然しそれは直ちに受動的 가능성이兩方向的であることと同一ではない。さればこそ同じ質料としての人間が病氣になるのは病氣になりうるものたる限りに於てであり、健康になるのは

健康になりうるものたる限りに於てであるとして、事實的に同伴する可能性の間に概念的な區別が立てられるのである。(六四)次に基體は變化の底にあつて原因と結果を媒介し、自らは變ずることなく持續する。(六五)

人となる變化に際して、人たる事は終始變る事なく、其同一性の爲にこそ前者が後者に成ると言ふ因果の關係が成立するのであり、(六六)此媒介を缺けば單に相異なる二つの事實の繼起はあつても因果の連續は認められない譯である。他方

可能性は、なるほどその關はる形相に關してみれば同一である。例へば種子に於て可能的にあり、樹に於て現實的にある形相は等しく樹の形相ではある。然し乍ら樹に於ては樹の形相はもはや可能性としては持續することはない。

可能性は實現と共に消滅するものである。デユナミスは受動的ではあつても形相に係はり、事實此兩概念の混用されることさへ稀ではない。(六七)即ち基體としての質料が形相に關はる係はり方が受動的デユナミスである。「各個の質料は

可能的に斯くの如きものである。」と云ふ言葉も之を裏書するものと解せられよう。而して之を形相の側からみれば此係はり合に於ける形相が能動的可能になること前述の通りである。

動力因に於ける動力、質料因に於ける質料が現實的個別存在に内在する他者の可能存在であると言ふ事は、換言すれば、能力や受動性は或現實的個別存在に内在する事によつてのみ能力乃至受動性であり、逆に或個別的存在は、そ

れが自己の中に有する能力又は受動性の故にのみ動力因乃至質料因となると云ふ事である。例へば精子は精子として人の動力因ではなくて、其中に人たるべき能力を含む限りに於て人の動力因であり、此石は此石としてヘルメースの像の質料因ではなく、ヘルメースの像が其中に可能的に内在する限りに於て之の質料因と呼ばれるのである。

此事は動力因と能力に關しては、デユナミスが他者又は他者としての其者の中に於ける運動變化の原理と規定せられるのに對應して、動力因がそこから運動變化の原理の由來するものと定義される事にも窺はれやう。他方質料因と

受動性に就ても、質料は離在するものではなく、常に之を含む者と數的に一であり不離であつて、唯概念的にのみ他者であると言ひ、又銅である事と可能的な銅像である事とが別であると言はれるのに徴しても明かである。動力因や

質料因が彫刻術、銅、或は精子、月經等の如く、それらが現實的に有する形相によつて呼ばれるのに對し、デユナミスは彫刻、とか人の如く、之等の原因がやがて實現すべきものとして尙潛勢的に有するところの形相によつて呼ばれるもの之を示すものに他ならなす。

(五II) Met. B, 2, 995, b, 6; A, 2, 1013, b, 7; A, 12, 1019, a, 16-18; A, 4, 1070, b, 28-30.

(五III) Met. A, 2, 1013, a, 31; Phys. B, 3, 194, b, 29-31.

(五四) Phys. B, 3, 195, a, 21-23; Met. A, 2, 1013, b, 23-25; H, 4, 1044, a, 35; Z, 9, 1034, a, 33-34; A, 6, 1071, b, 31.

(五五) De An. B, 5, 417, a, 17; πύρα ἐκ πύρας καὶ κινήσει καὶ ὑπὸ τοῦ πύρατος καὶ ἐπιπέδου ὄρους. De Gen. An. B, 1, 734, b, 21; a, 31.

(五六) Met. Z, 9, 1034, a, 33-b, 1: τὸ μὲν γὰρ σπέσμα ποιεῖ ὄρους τὰ ἀπὸ ἐξέτης. ἔστι γὰρ δύναμις τὸ εἶδος, καὶ ἀπὸ οὗ τὸ σπέσμα, ἐστὶ πύρα δύναμις οὗ γὰρ πύρα οὗτο ἐκ κινήσει ὄρος ἐκ ὑπέροπτος ὑπέροπτος καὶ γὰρ ἕνῃ ἐκ ἀπολόγ- κτλ.

- (五七) Met. θ 7, 1049, a, 1-3; *ὅταν ἴππῳ ἴσθι ἐπι βούλας ὑφάρκας ; ἢ αἶψά, ἀλλὰ μακρῶ χρόνῳ ἵππον ἵππο τὴν κατὰ στέφμα*, ロスは此箇所に対する註釋に於て「アリストテレーヌでは精子は形相因乃至動力因とされるのが常だから、此説は彼自身の思想ではなく、寧ろ通俗的な考を一般原則の説明の爲に採つてゐるに過ぎぬと解してゐるが、アリストテレーヌは茲で精子を質料であると云ふのではなく、能力だと云ふのであるから、我々の解釋によれば何等彼の思想と矛盾するものではなく、精子が動力因であり、可能のな人間でもあることは寧ろ當然であり、精子を人間の可能とせる考は他にも無数に指摘しうるが、之等は凡てアリストテレーヌの自説より、*πῶς ἀναλύει τὸ ἐν τῷ ἀδελφῷ*。 De Gen. An. A 21, 729 b, 5, 730, a, 2; 14; Δ, 19, 727, b, 16; B, 3, 736, a, 27; B, 4, 739, a, 17; Δ, 3, 767, b, 23; 35; Δ, 3, 772, a, 8, Met. θ, 8, 1050, a, 5.
- (五八) Met., θ 1, 1048, a, 26-28; Z, 7, 1032, a, 32-b, 2, 21-23.
- (五九) Met. θ, 8, 1049, b, 29-32; Eth. Nic. B, 1, 1103, a, 33-34.
- (六〇) Phys. B, 3, 195, b, 21-25; Met. 8, 1049, b, 29.
- (六一) De Gen. An. B, 4, 739, a 17-18; cf. De Gen. An. A, 21, 729, b, 5; 730, a, 2, 14; A, 19, 727, b, 16; B, 3, 736, a, 27; Δ, 3, 772, a, 8; Δ, 3, 767, b, 23; 35 &c.
- (六二) Met. Z, 7, 1032, b, 11-14.
- (六三) De An. B, 2, 414, a, 8; 25; Phys. I, 3, 202, a, 13-21. 同様ニ感覺の對象は現實的であり、感覺者は可能的であり、*ἐπιτρέψατο* (De An. B, 5, 417, a, 18) 而シテ兩者の協働の結果たる現實的感覺は單に感覺者の能力の實現によるに非ざるべし。 *Πῶς ἐπιτρέψατο ἐπὶ τῶν ἐν αὐτῷ ἐπιτρέψατο* (De An. I, 2)
- (六四) De Cael. A, 3, 310, b, 29; *καὶ ἐπιτρέψατο τὸ ἐπιτρέψατο καὶ τὸ νόον ἐπιτρέψατο, ἐπιτρέψατο καὶ τὸ νόον ἐπιτρέψατο, ἐπιτρέψατο* *ἐπιτρέψατο, ἐπιτρέψατο ἢ νόον ἐπιτρέψατο, ἐπιτρέψατο*.
- (六五) Phys. A, 9, 192, a, 32; Met. A, 3, 983, a, 29; b, 6-18; Δ, 28, 1024, b, 9; Z, 7, 1033, a, 9; A, 2, 1069, b, 8
- (六六) Phys. A, 7, 189, b, 32 ff. cf. De Gen. et. Corr. A, 7, 324, a, 15.
- (六七) Phys. A, 7, 190, a, 15; b, 24, A, 9, 192, a, 1.

(六八) Met. N, 1, 1088, b, 1.

(六九) Met. A, 2, 1013, b, 9, 24-25; A, 2, 1013, a, 29-30; A, 3, 984, a, 27; 983, a, 30; A, 7, 988, a, 32; A, 9, 992, a,

26; α, 2, 994; α, 5; Z, 8, 1033, a, 25; Phys. B, 3, 194, b, 29-30; 195, a, 8; De Gen et Corr. A, 7, 324, b, 14; Part.

An. A, 1, 639, b, 12. 此定義に於て *αφύρα* が略され *εσθεσση* の *ε* は略され *θεσ* は略され *α* は略され *α* 5。 Met. A, 3, 984, b, 22, A, 4,

985 a 13. A, 5, 987 a 8; 13, B, 2, 996, b, 6.

(七〇) De Gen. et Corr. B, 1, 329, a, 8-11; 24-26; Phys. A, 2, 209, b, 23; 4, 211, b, 36. &c.

(七一) *ibid* A, 5, 320, b, 12-14.

(七十二) Met. K, 9, 1055, b, 25-26; Phys. I, 1, 201, a, 29-b 3; cf. Met. I, 1, 1057, b, 9-14.

能動的可能が動力因に、受動的可能が質料因に内在して、現實存在をして夫々動力因或は質料因たる意味を與へるものであるとすれば、二つの原因に並ぶ目的因と形相因のデユナミスに對する關係は如何に解すべきであらうか。目的因や形相因の原因性はデユナミスと如何なる關係を持つてあらうか。我々は屢四原因が獨立的に認められるのは、製作の如き特殊の場合に限り、自然的運動に於ては、動力因と目的因は形相因に還元され、形相因と質料因によつて運動變化が解されると云ふ典型的な説に馴れてゐる。然しアリストテレスの説は斯くの如く簡單に説明し盡されないのではなからうか。形相と質料の對概念は本來存在の靜止的な構造分析による構成的概念であり、運動乃至活動を説明する概念は寧ろ可能と現實の動的概念である。此靜的概念と動的概念を組合せる所がアリストテレスの存在論の特色であり、^(七三)四原因説は之の媒介をとめるが、此異種概念の交錯はその異種性の故に決して一義的な同一性によつて解決すべからざるものがある。

先づ原因は一般に始源を意味する *αρχή* ^(七四) 又は稍狹義に原理を意味する *αἰτία* ^(七五) によつて現される。が前者は勿論後

者とても、其内容は單に時間的に先行する原因の意味に限らず、歸結に對する根據をも含めた廣い概念である。隨て四つのアルケー又はアイテイアの意味も之を近代的な概念に移せば自ら多様たらざるをえない。例へば形相因を時間的に先行する運動變化の原理即ち現今の用法に於ける原因と考へれば其形相は能力の意味に解さるべく、斯かる形相因は動力因に解消される。(七六) 然るに形相を現實存在と解すれば形相因は原因ではなくて寧ろ理由でなければならぬ。斯くの如き形相因は目的因と一致する。(七七) 最後に形相をば廣義に解して右の兩義を含ませる時には逆に動力因も目的因も形相因に還元されるが、此際には原因概念は其動的な機能を失つて靜的な構成的要素概念とならざるを得ない。(七八)

如何にも目的因は動力因を動力因たらしめるとも言へるが、之は目的因と動力因の直接的一致を意味しない。動力因は能力を自己の中に内在せしめる事によつて始源アムケイであり、目的因はこの能力の完成態として終局テロスである。自然現象に於て動力因、形相因、目的因の一致を説くのも勿論根據のないものではないが、(八〇) 之は單に一般的 (*καθόλου*) な見

地に於て、即ち抽象的な意味でしか妥當せぬ事を忘れてはならぬ。即ち自然現象の適例として人が人を生む場合、目的因も動力因も形相因も共に人であるが、三つの原因に於ける人が同一であるのは單に形相に於て、(八一) 即ち抽象的一般的な概念たる限りに於てである。運動變化を其具體的な姿に於て個物主義的存在論から解明せんとすれば此一般的に同一視される概念は存在論的には夫々異つた内容を持つものである。

目的因は第一の原理であると言はれるが、それが第一であるのは本質的優位を意味するものであつて時間的先行を意味しない。(八二) 隨てその原因性とは實は理因λογικόνである事に他ならない。(八三) アリストテレスは或は一切現象は目的即ち善を目標として持つと言ひ、(八四) 或は人の生れる時の目的因は恐らく其本質(人)に等しいと言ひ、(八五) 或は又他の自然現象例

へば蝕の如きものは目的因を持たぬと言ふが、^(八六)惟ふに宇宙論的見地からする究極的なテロスとしての目的因は善であるが、それが個々の運動變化に現れる際には形相因に一致するのであらう。即ち個々の形相實現の活動が究極的な世界目的としての善の部分的實現として統一されるのであり、目的因は特殊の存在に就て言へば未來的であり、世界に就て言へば永劫的である。この永劫的な目的因が善即ち神であり、其永劫的である所以は神が世界歴史の凡ゆる過程を通じて現前する永遠者であるからである。然し上述の如く目的因に還元された形相因は直ちに動力因と一致する譯にはゆかない。彫刻家の技術や精子の如きは動力因であるとしても目的因ではない。目的因は完成態でなければならぬが技術や精子の力としての人は未完成であつて未だそれ自身の形相を現して居ないからである。デユナミスが動かす者に於ける運動の原理である以上、デユナミスを含まぬエンテレケイアとしての目的因が斯の如き意味での動力因たりえぬ事は言ふ迄もない。目的因が動かされず、隨て自ら動かすして唯他を動かす者であると言ふ事は、動力因が動かす者であるのとは全く異つた意味を持つべく、*ロツス*の如く *proximate* と *ultimate* によつて兩者を分つのは充分適切であると言へない。アリストテレスは時間的に第一の動力因として太陽の如きものを考へてゐるが、^(八八)目的因はひとしく第一原因と呼ばれるにしても斯くの如き原因ではなくして、實現すべき目標であり、愛される事によつて動かすものである。^(八九)だから之に對して動力因が動かされる事によつて動かす者であると言ふ事は二重の意味を含む。即ちそれは時間内の現象として先行する動力因を持つと言ふ事の他に、尙目的因によつて惹付けられる事によつて動かされつつ、受動的可能に對して言へば動かす者であると言ふ意味である。同時に受動的可能は能動的可能に對しては動かされる者であるが、それ自ら動く者であると言ふ事も出来る。何故ならば質料も單に無記不動の基體であ

(ㄱ) Met. θ, 8, 1050, α, 4... πρῶτον μὲν ὅτι τῆ γενέσεαι ὑστερα τῶ εἶδει, καὶ τῆ οὐσίᾳ πρότερα (ὁ δὲν ἀνὴρ παίδος καὶ τυχόντος ἀστέματος τὸ μὲν γὰρ ἕως ἔσται τὸ εἶδος τὸ δ' οὐ), καὶ ὅτι ἀμυν ἐπὶ ἀγῆνη βαδίζει τὸ γινώσκον καὶ τῆος (ἀγῆνη γὰρ τὸ οὐ εἶναι, τὸ τῆος δὲ εἶναι ἢ γένεσις), τῆος δ' ἢ ἐπέπειτα, καὶ τούτου γὰρ ἢ δοξαίης λαμβάνεται.

(ㄷ) De Part. An. A, 1, 639, b, 14.

(ㄱ) Met. A, 3, 983, α, 31.

(ㄷ) Met. H, 4, 1014, b, 1-20.

(ㄱ) ibid.

(ㄱ) De Gen. et Corr. A, 7, 324, b, 14: τὸ δ' οὐ εἶναι οὐ κοινόν (ὁ δὲ ἕως οὐ κοινόν, εἰ μὴ κατὰ μεταβολὴν) τὸ ἄν

τάνονは神或は理性を單に目的因となす説に反對して、それは同時に動力因である事を論證する。(Psychologie des Aristoteles Sec. 234 ff) 其論據の一はアリストテレスはアナクサゴラスがヌースを動力因とした事を是認賞讃してゐる事であるが、理性が動力因である事と神が動力因である事とは必ずしも同一ではなく、又アリストテレスの賞讃はアナクサゴラスが理性を動力因とした事を全幅的に肯定するものではなく、兎も角之を原理として取上げた事に對する部分的肯定であると解釋する事も出来る。フレンターノは次でアリストテレスの著作の中で神を動力因として示したと解される箇所を拾録してゐるが (Top. IV, 5, 126 a 34; Phys. II 6, fn. cf. De Part. An. I 1, 641 b 10-26. De Cael. I 4, 271 a 33. De Gen. et Corr. I 6, 323 a 31. De Gen. et Corr. II 10, 336 b 27. Met. Γ 8 fn. Met θ 8, 1050 b 4. Met. Δ 4 fn. Δ 4, 1071 b 12. Δ 7, 1072 b 30. Δ 10. EN. I 10, 1099 b 12. VI, 2, 1139 b 6. VIII 14, 1162 a 6; X 9, 1179 a 24. X 10, 1179 b 22. Pol. VII 3, 1325 b 28. Oec. 3, 1343 b 26. Rhet. II 23, 1398 a 15.) 之等は神を動かすもの (τὸ κινῶν) と解せしめるに充分であるにしてもそれを目的因に對する動力因 (θεὸν κινῶν) と解せしめるには足らぬ。動力因は時間的に先行するが、目的因は時間的に後起するか或は超時間的永遠的であるとして時間的先後に無關係である。又 Met. Γ, 8, fn. Δ 7, 1072 b 30; Met. θ, 8, 1050, b, 6. 等に於て時間的に最も先なる動力因は必ずしも神たるを要せず、むしろ (1071, α, 15-17) 太陽の如き存在を意味する

るものであらう。斯る第一動力因の活動も目的因としての永遠的な神を豫想するが、此事によつて第一動力因が第一動力因たる事を止めるのでもなければ、第一原因即ち目的因が第一動力因になる事をも要しない。プレнтаーノールは第三の論證としてアリストテレースは目的のみで生起はありえず、目的は動力因なくしては原因たりえぬ事をみとめる事を指摘する。然し目的因が動力因にまち、逆に動力因が目的因にまちと言ふ事からは目的因である神が同時に動力因であると言ふ結論は生じない。況や目的因と動力因の一致が歸結されてはならない。神は目的因として一切の動力因をして動力因たらしめる。然しその事によつて神が動力因であると云ふ事は出来ない。動力因はあく迄個物に内在する一種の(能動的)潜勢的形相である。神はこのデユナミスをして活動の原動力たらしめるものではあるが、それ自ら具足圓滿せる完成態に休らふものでなければならぬ。

要するに神は目的因として動かす者であつて動力因として動かす者ではなく、一般に目的因が同時に動力因であると言ふ事は唯抽象的な意味に於ける他は言ひえない。

(八八) Met. A, 5, 1071, a, 15

(八九) Met. A, 7, 1072, b, 3

(九〇) Met. 0, 1, 1046, a, 22; 0, 8, 1049, b, 9

(九一) De An. I, 2, 426, a, 4: ἡ γὰρ τοῦ κομμητικοῦ καὶ ζυγητικοῦ ἐπέξεα ἐν τοῖς πλάσματι ἐπιπέσει.

II

目的因が理由として狹義の原因から區別され、形相因が原因たる限りに於て動力因に歸すれば、時間的に先行する原因は動力因と質料因であり、兩者の原因性がデユナミスの二義に相當する。依てデユナミスとは個物に内在して之を原因たらしめる原理、原因者に内在する結果の形相、即ち原因性其者に他ならない。然らば動力因と質料因の關係は如

何。デュナミスが同一形相に關り、同一の實現をなし乍ら、動力因に内在するか質料因に内在するかによつて能動的可能と受動的可能に分れると言つたが、然らば動力因と質料因は何によつて區別されやうか。若しそれが能動的可能或は受動的可能を持つ事によると言ふなら循環を免れまい。動力因は形相を與へ、質料因は之を受ける質料を備へる。形相は動力因に内在する限りに於ては可能態に止まるが、之が動力因を離れて、それに對應せる質料の上に具現される時には現實的となる。質料因は動力に内在する形相を、動力因から自己の方に奪ひ取る事によつて形相の實現を將來する。質料は無規定であり、多様の形相を受容しうるものではあるが、規定的地方であるところの形相は此無規定な質料をまつて初めて實現する。動力因に内在する能力は決定せる形相である。それは質料と結合するか否かによつて或は實現し或は實現しないが、其實現しうる形相は一樣である。然るに質料因の方はそれが或能力との關係に於てみられる限り、此能力の受容性ではあるが、他の能力との關係に立てば其能力に應じた受容性を現はす。例へば種子の中に内在する樹木の形相は樹木である他はない。而も具體的には例へば椗以外の樹になる可能性を含まぬ。然るに地は此椗の種をして發芽せしめる條件として之の質料をなすから、椗たることの受動的可能性を持つと考へられる。然し地は桃の種を受取つて桃を發芽せしめる事もあり、桃の種との關係に於てみられれば桃の受動的可能性を持つ。かくて能動的可能はそれ自らによつて限定されて居るのに對して受動的可能はそれ自らは無規定であり、唯能動的可能によつて限定されるのである。然し質料と雖も全く無規定ではない。「何でも物を打ちさへすれば音が出る」とは限らない。即ち羊毛を打つても何の音も出ないが、然し青銅や凡て滑かで洞なものは打てば鳴るのである。^(九二)質料が形相によつて限定される範圍も其質料によつておのづから一定に限られる。例へば地は種の發芽と言ふ事に對して質料因

を爲すが、物の燃焼に對しては質料因たりえぬ。質料因のもつのは比較的廣汎な可能性であり、動力因は此可能性に狭い限定を興へる可能性を擔ふ。他方に於て動力因は觀念的形相的には限定されてゐても、實質的には無規定であるが、質料因に於ては其逆である。斯くて質料が形相によつて觀念的に限定されると共に形相は質料によつて實質的に限定される。例へば銅はヘルメースの像にもアポロンの像にもなりうるが、彫刻家の技術に内在するヘルメースの表象が之に一方的決定を興へる。逆にヘルメースの像は單に形相としては銅像でも塑像でも大理石像でもありうるが、之が特殊の質料たる銅の上に實現される時には銅によつて實質的に限定されるのである。

然るに質料と形相に於てみられる可能性の廣狹の別は同様に類と種との間にもみられる。類と云ふものは種に比して廣汎な可能性の範圍を持つ。ヘルメースの像が限定された形相であるのに、像一般は無限定であり、或は少くも多くの多様性を包容しうる。だからアリストテレス自身も類を以て質料に當て、之に對してエイドスと言ふ語は種と形相の兩義を含ませられてゐるのである。然し乍ら凡ての類が類である事によつて質料なのではない。類は形相である

のに質料は可能性たる事に於て形相に關り乍ら他面基體としての一面を有するからである。ヘルメースの像の質料は像ではなくて銅とか石とかである。したがつて類の持つ廣汎な可能性が質料の持つ可能性と一致するのである。(九四) 即ち銅がヘルメースの像の可能態であるのは、特にヘルメースの形相に限る可能態ではなくて像一般の可能態なのである。

だからそれは全く無規定ではないが、比較的廣範圍を許す規定であり、之に對して形相の持つ可能性は種的可能性である。然し單に質料と對立せしめられた形相は種的であつて個別には到らない。個別と言ふものは形相が質料と結合する事によつて生ずる。故に個別は質料の類的可能の上に形相の種的可能が加はる事によつて現實的に存在する

に至るものである。隨て嚴密な意味で個別的な存在は現實的であつて個別の可能と言ふものは實はありえない譯である。普通にはアリストテレスの個別は類から種への連続的限定の極限として理解されてゐる。そして之は事實アリストテレスが形相論からして到達せる極限である。然し單なる概念の廣狹の差による種類の關係は質料と形相の相互限定と言ふ具體的な關係の抽象面に於て現れるものである。隨てそれが眞實の個物に到りえないのは當然である。質料は單なる形相論の見地からみれば類概念であり、その限りに於ては種によつて限定される純粹に受動的なものであるが、實在論的には之の有する基體によつて實質的限定をなすものである。

(九二) De An. B, 8, 419, b, 14.

(九三) De Gen et Corr. A, 7, 324, b, 7; De An. B, S, 417, a, 27. cf. Faust op. cit. I, 170, NB I.

(九四) De An. I, 5, 430, a, 10; ἐπιείρημα ἐστὶν ἀκίνητον καὶ ἀκίνητον ἐστὶν τὸ μὴ εἶναι ἐκείνου γένους (τὸ τὸ ἐστὶν ἐκείνου γένους ἐστὶν ἐκείνου γένους) ἐκείνου γένους καὶ ἀκίνητον καὶ ἀκίνητον...

アリストテレスは能動的可能を受動的可能に對せしめ、之を質料に對する形相とみると共に、能動的可能をば更に有理的能力と無理的能力の二種に分ち、^(九五)可能と云ふものは能動的にもせよ、受動的にもせよ、凡て對立の可能であるが、^(九六)特に有理的能力は反對の能力であると言ふ。隨て他の可能即ち受動的可能や無理的能力は矛盾の可能であると

言ふ事になる。^(九八)可能を對立の可能と言ふのは、可能が反對的又は矛盾的に對立せる契機より構成されると言ふ事である。然し此對立契機が平等であるならば、斯かる可能は全く靜止的であつて、決して運動の原理たる事は出来ない。^(九九)勿

論力と言ふものは現實的な運動ではなく、自己の中に抑制された運動である限り、或意味で反對の方向を含むものに違ひない。然し力の本質は、この靜止と抑制を破つて出ようとする傾向に存する。そしてこの靜止の否定は對立する二

方向の一方の優位によつてのみ可能である。アリストテレースは有理的能力の對立項の二者擇一の契機として、欲求 (δρεσς) とか意思 (προαιρέσις) を導入するが、之は可能性其者から動性を奪つて二方向の均衡を考へる結果、動的契機を其能力の外部に認めんとするものである。(100)(101) 然し若し有理的能力の對立契機たる反對對立が欲求や意思によつて一方的實現を興へられるとすれば、無理的能力も亦矛盾する二方向を中に含むのであるから、此二方向の何れか一方に實現を興へんが爲には、能力其者の外に何らかの決定契機を認めねばならぬ事にならう。アリストテレースは無理的能力に於ては斯かる決定契機の必要を認めてゐない。「然し有理的能力が受動性と合して必然的に實現すれば反對項が同時に實現する事となるが之は不可能である」と言ふ事が決定契機として欲求意思等を導入せしめた理由であるなら、我々は全く同等の權利を以て無理的能力が受動性と合して必然的に實現すれば矛盾項が同時に實現する事となるが之は不可能だと言はねばならない。然し乍ら斯くの如き理由によつて一般に能力の外部に決定的動機を認めると言ふ事は正に力としての可能の否定に他ならない。

抑アリストテレースが凡て可能は對立の可能であると言ふ理由は、一つには事態が現實になる事もありならぬ事もあると言ふ事と、二つにはその可能が存在すれば或結果を生じそれが存在せねばその矛盾の結果を生ずると言ふ事である。(103)(104) 然し可能は可能である限り矛盾的契機を内に含むが、自己の外部にその志向的方向として矛盾に對するのではない。それは矛盾存在ではあるが矛盾の可能ではない。(105) 即ち可能であると言ふ事は存在と非存在の統一を意味するが、それは直ちに存在の可能でもあれば非存在の可能でもあると言ふ事と同一ではない。可能は之が彼かの形で存在と非存在に對するのではなくして、存在であると共に非存在であり、而も尙非存在の原理ではなくして存在の原理と

しての一方性を有する。甲の可能は非甲の可能ではない。外界の條件の缺如の爲に甲の可能が甲の現實にならぬと言ふ事はそれが非甲の可能となると言ふ事とは別である。之はアリストテレースが可能の兩方向性の根據として可能がそれ自ら存在する事によつて存在の原理でありつつ、その存在せぬ事によつて非存在の原理であると言ふ第二の理由を提出する所以であるが、當該可能が缺如せる時の消極的結果は最早その可能の生んだ結果ではなくなる故之亦理由として成立しえない。

能力は其實現を他者たる受動性にまたねばならぬから、受動性は能力の發動を消極的に抑制して可能をして可能に止まらしめる否定原理であると言はれるが、能力が其實現を他者たる受動性に俟つ事によつて有する否定性は單なる

(一〇六)

觀念的分離に由來する消極的否定にすぎない。この消極的觀念的な否定性が積極的現實的否定となるのは、受動者が現實的に缺如する事によるが、此現實的否定の根源は受動性其者にあるのではなく、却て之を缺如せしめる他の能力にあるのである。例へば飢が滿されないのであるが、食物に其實現的否定があるのではなく、食物を買ふ事を妨げる貧乏の爲である。勿論食物が飢に全然關りないと言ふのではないが、之の有する否定性は觀念的消極的否定であつて現實的積極的否定の地盤たるに過ぎない。地は種の發芽の受動的可能性であり、地がなければ種は發芽しない。さればとて地は種を發芽せしめざるをうるものではない。地はあく迄種を發芽せしめうるものに止まる。種が地に播かれずして發芽せざる時、發芽せしめないものは地ではなくして種を地に入らしめなかつた原因でなければならぬ。若し我々が觀念的否定を以て現實的否定にすりかへる時は、飢ゑたる者に食を與へずして食慾の否定を教へる僧侶的詭辯に陥るであらう。受動性は決して能力を實現せしめぬ可能でない事は、能力が實現しない事があるからとてそれが實現せぬ

能力でない事と共に最も注意すべき點であつて、之を看過すれば能力と受動性の別も實在的可能としてのデユナミスの特異性も全く理解されえないであらう。

上述せる如き觀念的否定の生ずる所以はデユナミスが自立的存在即ち自己としての自己の存在形態ではなく、具體的渾一的な運動乃至實現に即して、之を分析抽象する事によつて得られた觀念だからである。現實的な運動といふものは要素の寄集めから出来るのではない。然し思惟は常に要素から構成する。具體的現實的に起る事は例へば地に於ける發芽である。然し我々人間の思惟は、此具體的現象をして種と地と其結合と云ふ要素に分析して、斯くしてえられた要素の再構成によつて現實を説明しようとする。此際要素が端的に要素として自立性を持つならば要素の再構成といふ事は不可能とならざるを得ない。之を可能ならしめる爲には分析せられた要素が截然と分たれた獨立の自性をもつてではなく、其中に非合理的にして不定的なものを含まねばならぬ。恰もベルグソンに於て、要素の結合によつて連續を考へんとすれば要素が端的な要素として思惟されずして一々の要素が他の要素に對して貫入性を持たねばならぬ如く、デユナミスと云ふ概念も亦或意味で斯かる貫入性を持たねばならない。此貫入性は思辨的悟性の分析に於ては完全に論理化し盡されぬ現實の機能である。若し能力に於ける肯定の優位を許さなければ、可能性の交互結合によつて實現を再構成する事は不可能である。即ち能力と受動性に於ける對立方向が平等であるならば、兩者が合しても肯定契機と否定契機は完全に相殺し盡して何もの實現をも認められない筈である。デユナミスに於ける肯定の優越的契機は現實を基底として之に即する事により、此基底を缺く抽象的可能から區別されると共に、此現實に對する否定によつて現實から獨立する。能力は現實的には受動的可能を伴ふか伴はぬかの何れかにきまつてゐるが、此對應

又は缺如の現實性を一應否定しなければ、可能性が現實性から獨立して其意味を保ちえず、所詮可能を現實と同一視するメガラ派の謬を免れない。^(一〇七) 現實を遊離すれば論理主義の空虚に陥り現實に膠着すれば可能性の端的否定に終る。アリストテレースのデユナミスは現實に不即不離の關係を保つ事によつて論理と事實を媒介するものである。實在的可能とは現實的概念である。此概念の含む非合理性、即ち其肯定契機の優位を認めざる限り可能より現實への實現、運動を解しえざる事は、恰も單なる點の集合によつては連續を解しえざると一般である。

(九五) Met. 0, 2; 0, 5, 1047, b, 31-48, a, 4.

(九六) Met. 0, 8, 1050 b 8-12; 30, 0, 9; 1051, a, 6; cf. Platon, Rep. I, 333 E.

(九七) Phys. 0, 1, 251, a, 28-30; Met. 0, 2, 1016, b, 5-25; 0, 5, 1048, a, 5-10; Eth. Nic. E, 1, 1129, a, 13-17.

(九八) 但し Met. 0, 9, 1051, a, 5 ff. とは凡て可能であることと關して語られるものは「同じものが反對であることが可能である」と言ふ。例へば健康にしようものは病氣にするものと同じであり、同時的である。同じ能力が健康にもするし病氣にもするし停止もするし運動もする。建築もすれば破壊もする、建てられれば壊されもする。反對の可能なものが同時に存する。と言ふ之は前述の區別を無視するものである。ロツスは之を能力でなく可能性に關する立言であるとして矛盾を避けようとするが、この命題に於て能動的可能と受動的可能を對立的に例證してゐる點からして此解釋も不充分である。之は「凡て可能である事に關して語られるもの」と言ふのが直接能動的又は受動的可能を現するものでなく、此可能を持つ基體を意味するものと解すべきであらう。然る時は De Cael. A, 3, 310 b, 29 に於て健康と病氣の受動的可能を同一基體に歸し乍ら再可能を概念的に區別して ἡ ἐν τῷ αὐτῷ 致する。同様と Cat. 10, 13, a, 18: ἐν ἐπι μὲν τῶν ἐναντίων, ὑπερβολικῶς τοῖς ὅμοιοις, δυνατὸν εἰς ἄλλα μὲν αὐτῶν ὑπερβαίνει, εἰ μὴ τῶν ὁμοίων τὸ ἐν ὑπόλοιποις, ὅθεν τῶ πρῶτῃ ὑπερβαίνει εἶναι καὶ ἕως τὸ ὑπερβολὸν δυνατὸν νοσησθαι καὶ τὸ δυνατὸν μέλειν ὑπερβαίνει καὶ τὸ ὑπερβολὸν ὑπερβαίνει, καὶ ἐν ὁμοίοις καὶ ἐν παύσις ὁμοιοῦν δυνατὸν ὑπερβαίνει. 私に此解釋を裏書す。

(九九) 高橋里美氏「體驗と存在」二五七頁。

(一〇〇) Met. 0 5, 1048 a 8-11, 0 8, 1050 b 30-33 拙著「アリストテレスの倫理學」七四頁以下参照。

(一〇一) Hartmann, Mögel u. Winkl. Einl. 11. Man musste... entweder die Dynamis zu einer Art von Latenzzustand der Eurgenia machen oder aber den Anstoss zur Verwirklichung in einer Macht ausserhalb der Welt suchen einer schaffenden Vernunft, einem Willen, einer Vorbestimmung. cf. Faust, op. cit. I, 103.

(一〇二) Met. 0, 5, 1048, a, 8 αὐτὰ μὲν γὰρ πᾶσαι μὲν εἰσὶν ἐνὶ τῷ ἐνερτικῷ, ὅτε διὰ ποίησι τὰ ἐνερτικά· τὸ τὸ ἀδύνατον· ἐπίτηθ' ἀπα εἶσθαι τι εἶναι τὸ κίνητον· λέγεται δὲ τὸ τὸ ὁρᾶν ἢ ποιεῖσθαι.

(一〇三) Met. 0, 8, 1050, b, 8. cf. Ross' Comm. on 1051, a, 5.

(一〇四) Met. 0, 8, 1050, b, 33.

(一〇五) cf. Met. 0, 9, 1051, a, 16-17.

(一〇六) 田邊先生「哲學と科學との間」一九八頁。

(一〇七) Faust, op. cit. 8-40.

可能が運動の原理であり、原因性であるとすれば、現實的な運動との關係は如何に解さるべきであらうか。我々はこの問題を解く爲に可能が可能たる條件とそれの實現の條件を尋ねよう。

アリストテレスはメガラ派に反對して、現實と可能を區別し、現實ならぬ可能を認めんとするが、^(一〇八)我々が此説を念頭におきつつ形而上學第九卷第五章に於て有理的能力の關はる反對對立のうちの「何方をすぐれて欲求するにしても、それが可能である如くにあり、且其受動者に合する時には此事を爲すであらう。だから凡て理性に即して可能なものは、その能力を持つものを、それを持つ如き仕方^(一〇九)に於て之を欲するならば此事を必然的になさねばならぬ」と

言ふ命題に逢着すれば、此對應する受動的の與へられる事と、外的障害のなき事とは、能力が能力たる爲の條件ではなくして、其實現の條件であると解するのは寧ろ自然であらう。然るに此期待は之に續く言葉によつて昏まされる。

「受動者が現前し且或状態にあるならば爲すことが出来る。が然らざれば爲すことは可能でないであらう。(即ち外から妨げるものがなければと云ふ事を附記する事は必要でない。蓋しそれは爲す事⁽¹⁾の能力である如き仕方⁽²⁾に於て能力を持つのであるが、而もそれは常にあるのではなくして、或仕方⁽²⁾に於てある限りに於てであり、其條件の中には、外から妨げるものが除外されてゐるであらう。即ち之等の事は定義された中に存する規定によつて何等かの仕方⁽²⁾で除外されるからである。」⁽¹⁾⁽²⁾ 茲に用ひられた *ou dynastai* を嚴密な意味で可能性の否定と解することなく、單に爲すことがないであらうと云ふ未來の事實の否定に止まるとすれば、⁽¹⁾⁽²⁾ 前文と撞着する所なく我々の疑義は解消するであらう。然し乍ら之を文字通りにとるとすれば、對應可能性の現實的對應と外的障害の缺如の二條件は、却て能力が能力として存立する爲の必要條件に數へられてゐるものとみななければならない。受動的可能⁽¹⁾が缺如したり、外的障害が壓倒的であると云ふ條件の下に於て可能⁽¹⁾が考へられぬ事は勿論であるが、アリストテレースの右の言葉は單に之に止まらずして、進んで受動的可能⁽¹⁾が現存し、外的障害のないと云ふ事を、能力の能力として成立する爲の必須條件としてゐるものとも解せられる。⁽¹⁾⁽²⁾ 我々は姑らくこの解釋を假定して思惟を進めてみよう。

然る時に我々は同卷の第七章に於て再びこの解釋に撞着する如き詳説に逢着するであらう。該所の敘述は次の如くである。「(一) 可能的にあるものから、理知によつて完成的になるものの定義は、それが願望される時、外なる者が何も妨げねば生じると云ふことである。(二) 然るに他方醫される者に於ては、内部にあるものが何ものも妨げぬ時に(可

能)である。(三)而して可能的に家であるものも同様である。若しそのものの中なるもの、即ち家になるものの質料の中なるものが何ものも妨げず、又附加されたり除去されたりせねばならぬものがないならば、之が可能的に家である(四)又生成の原理が外部にある限りの他のものについても同様である。(五)又原理がそのものの中に存する物の場合には外部の何物も妨げねばそれ自らによつて存する如きもの(が可能的)である。(一三)と。之等の諸項はロッスの如く總括して受動的可能としての質料の規定と解さるべきではなく、(一)は有理的能動的可能(二)と(三)は之に對應する受動的可能を規定し(四)に於ては進で能動的及受動的、な無理的可能性に迄同一の規定が適用され(五)に至つて勝義のデユナミスに對するピュシスが規定されてゐるものと解すべきであらう。(一一四)と。ところで(一)及(五)に於ては外的障害の缺如は明かに可能が可能として成立する爲の條件ではなくして、それが實現する爲の條件として述べられてゐる。(一一五)然るに(二)に於ては、何ものも妨げず(*ōtan imphēu xōxiō*)と云ふ句は文章の構成上、生ずる(*vivencia*)に掛るのではなく、(一)に於ける、願望される時には云々に對立して直接可能の定義を形成するものであるから、茲に言ふ内的障害の缺如は實現の條件ではなくて可能の可能たる爲の條件である。之は(三)の例證に徴しても明かであるし、抑内的障害のある可能と云ふ概念其者が無意味な事は自明でさへある。茲に對應する可能の現實的對應が何れの條件に屬するかに就ては一言も觸れてゐないが、能力に關しては、(一)及(五)に於て實現條件として擧げてゐるものが單に外的障害の缺如に限る事より推せば、受動的可能的現實的對應は依然として能力の可能條件に數へられてゐたとみるのが自然であらう。然らば先に第五章に於て能力の可能條件と考へられた外的障害の缺如が第七章に於て實現條件に移されたのは何故であらうか。之は恐らく先には問題が有理的能力に限られたのに茲では(四)(五)の如く無理的能力が考慮に入つて來た爲ではなからうか。蓋し

有理解能力の際には其實現の條件は能力の外部なる欲求又は意思に求められたから、之等の發動原理が缺けてゐる間は能力は受動的可能的對應と外的障害の缺如と云ふ二條件を満しても、未だ現實ならぬ可能に止まりうる譯である。然るに無理的能力には斯かる外的な決定契機は認められないから、若し此二條件が満されて居れば、能力は最早單なる能力に止まりえずして必然的に實現するであらう。(一六)

即ち斯くては可能が可能たる爲の條件の他に其實現條件が見失はれて遂に現實的でない可能を否定すると云ふ結果を生ずるが、之は正にアリストテレスの斥けるメガラ派の主張に他ならないからである。斯くて受動的可能的興へられる事を能力の能力たる爲の條件とし、外的障害の缺如を其實現條件と考へる事によつて、能力の關する限り一應の困難を免れ得た如くである。が、茲に問題となるのは(□)に於ては可能の可能たる條件が語られてゐるにも拘らず、單に內的障害の缺如のみを擧げて、能力が現實的に對應すべき事を擧げてゐないと云ふ事實である。若しこの事が、受動的可能に於ては能力の現實的對應が其實現條件に廻されてゐた事を意味するとすれば、ひとり能動的可能に於てのみ對應可能的現實的對應が、其能力たる爲の條件と考へられねばならぬ理由は認めえず、之は却て能動性と受動性の轉倒でさへあるのである。受動性が能動性に俟つ事は、能動性が受動性に俟つ以上でなければならぬからである。若し又對應可能が現實的に對應することは受動的可能に於てもその可能たる爲の條件であるのに、茲には唯不注意の爲又は簡結性の爲に省略されたのであると解して此難問を強ひて免れようとしても、外的障害の缺如と對應可能的現實的對應は何故其一方のみが特に可能條件であり、他方が實現條件であると考へられねばならぬかと言ふ難問を免れる事は出来ない。對應可能が興へられねば可能が實現されぬから、その對應する事が可能の可能たる爲の條件として要求されるならば、外的障害があつても實現は生じないのである

から、外的障害の缺如も亦同様に可能の條件たるべき筈であらう。斯くては第七章の所説はラッソンの解した如く實は第五章の所説と一致すべく、私が上に(一)と(五)を實現條件と解したのが誤であるから然らざればアリストテレースの表現が不完全であると云ふ事とならう。然し之は再びメガラ派の思想に歸る事に他ならない。茲に於て我々は單に受動的可能に於てのみならず、能力に於ても對應可能の現實的對應は外的障害の缺如と共に可能の實現條件であると解さなければならぬ。事實又建築家は材料がなければ現實的な建物を造らないが、彼の建築能力は之によつて其實現を阻まれるにしても、能力そのものが能力たる事を止めるのではない事は、アリストテレース自身の明言する所である。(一一七)にも拘らず形而上學の敘説が右の如き混亂を示す所以は、惟ふに上述の二條件を能力の能力たるの爲の條件から其實現條件に移す時には、却て能力の可能條件が見失はれる事になる爲であらう。然しこの困難は有理能力の場合にはアリストテレースによつて實現の條件とされた欲求又は意思を可能件に移し、欲求や意思の能動性こそ能動的可能の本質であると解する事によつて解決される。(一一八)無理能力に就ても同様に欲求(Desires)但し此際は願望(Bonities)ではなくて欲望(Érōbia)である——又は之に類する傾向性によつて同様の置換を行へばよい譯である。有理的にもせよ無理的にもせよ能動的可能の本質はそれが不定的靜止的な質料に對して決定的な方向を與へる運動原理たる事にあるのであつて、働かれる者の對應する事や外的障害のない事或は外的障害が壓倒的でないこと云ふ事にあるのではない。受動的可能の可能條件が自己の中に障害を含まぬと云ふ事であるのに對して、能力の條件は此受動性に實現の決定的發端を與へる原動力たる事にある。之が原本的能力概念の整合性がアリストテレースの不明瞭なる表現を超えて要求する解釋でなければならぬ。

(107) Phys. 0, 1, 251, b, 31-a 1; Met. 0, 3.

(108) Met. 0, 5, 1048, a, 11-15: ἰσοπέδιον γὰρ ἂν ἠέξηται κρηπίς, τῷτο ποιεῖται ἕαν ἴσῃ δύναται ὑπέρηλ και ἀναπέδη τῷ πηδύκῳ ὅστε τὸ δυνατὸν κατὰ λόγον ἔσται ἀίχμη, ὅταν ὑπέρηται οὐ ἔχει τὴν δύναμιν και ἴσῃ ἔχει, τῷτο ποιεῖν.

(109) ibid. 15-21. ἔχει δὲ πηρόντος τῷ πηδύκῳ και ἰσὶ ἔχοντος [ποιεῖν]. εἰ δὲ μή, ποιεῖν οὐ δύνησεται (τὸ γὰρ κρηπίδος τῷ ἕκτο κωλύοντος προσδιορίζεται οὐδὲν ἔτι δεῖ τὴν γὰρ δύναμιν ἔχει ἴσῃ ἔσται δύναμης τῷ ποιεῖν, ἔσται ὅ ὁ πῶντος ἀλλ' ἔχοντος πῶς, ἐν ὅτῃ ἀπορροήσεται και τὰ ἕκτο κωλύοντα ἀπαρτῆται γὰρ τῶντα τῷ ἐν τῷ ἀπορροῦντος προσόντων ἔντα).

(110) De An. B. 5, 417, a, 27. ὅ ὅ ἔν βουληθῆς δυνατὸς δεορῆν, ἂν μή τι κωλύον τῷ ἔκδοθεν ὅ ἕκτο φησὶ ὅ ἕκτο 前 後の關聯は外的障害の缺如を以て思惟能力の成立條件とせしめたりは寧ろ其實現能力として見るべしと解される。斯様な例は恐らく何の國語にもみられ得現存し得る。

(111) Phys. 0, 1, 25, b, 1-7 φαντασματικῶν ὄψεων.

(112) Met. 0, 7, 1019, a, 5-14 (1) ὁπος δὲ τῷ ἡνὲ ἀπὸ ἀνατολῆς ἐντελέξειε γυγνομένου ἐκ τῷ δυναμει ὕπτος, ὅταν βουληθῆς ἔγρηται κρηπίδος κωλύοντος τῷ ἐκδοθέν, (2) ἐκεί ὅ ἐν τῷ ὑπερκοίσειν, ἕκτον κρηπίδιν κωλύον τῷ ἐν ἀσπῆ. (3) ἀπόδος δὲ δυναμει και οὐκία εἰ κρηπίδιν κωλύει τῷ ἐν τούτῳ και τῇ ὕψι τῷ γήρασθαι οὐκίαν, οὐδ' ἔστιν ὅ δεῖ προσεχέσθαι ἢ ἀπορροήσθαι ἢ μεταβῆσθαι, τῷτο δυναμει οὐκία. (4) και ἐπὶ τῷ ἄλλων ὁμοιωτος ὅταν ἔκδοθεν ἢ ἐπὶ τῇ τῶν γυγνομένων. (5) και ὅταν ὅν ἐν ἀσπῆ τῷ ἔχοντι, ἕκτον κρηπίδος τῷ ἔκδοθεν ἐπιποδίζοντος ἔσται ἐπὶ αὐτῷ κτλ.

(113) Comm. on 1049, a, 5-18.

ロツスの如く解すれば(一)と(二)及(三)の間には何等の區別もなく、(一)及(三)は(一)の例に過ぎない。それでは(一)の條件が外的障害の缺如であり(二)の條件が内的障害の缺如であると云ふ區別が解けなす。又 τῷ πῶν... ἐκεί ὅ の係結も無視されることになる。單なる例ならば ἐκεί ὅ ではなくて οἷον τῷ πῶνと云ふも亦ある筈である。又(三)は(一)と同様理性による製作の場合であるが、然らば無理的な變化運動は如何であらうか。ロツスは(四)をも前者に含めて唯(五)のみを之に對する無理的變化と解してゐる様であるが、運動

提されてゐるとは解し難い。むしろ「時には」と言ふ表現の中に此條件を讀取の方が遙かに自然であらう。「常に」と「時には」が斯く接近して一文中に現れる事の不自然さは「常に」と言ふ限定を、如何なる能動的及受動的可能に於ても例外なく斯かる事が妥當すると云ふ意味に解すれば、單に表現上の不自然であつて本質的には矛盾を含まぬ。又 *ἐν* を *ἐν* に代へんとす。Huydnck の示唆も大きな蓋然性を持つものと思はれる。而して此「時には」は數行下に *b. 2. ἄρα ὁ οὐτός ἐστιν ἐν τῇ κοινῇ ἐπιστῇ καὶ δαπάνῃ*、「而して斯くの如くある時には、若し何かが妨げねば、それは働き且思惟する」に於ける *τῇ κοινῇ ἐπιστῇ* に他ならぬから茲に於ては不完全乍ら問題の二條件が實現條件たる事が認められてゐたと解する事も出来よう。cf. Gen. et Corr. 324, b, 7-9. *τὸ δὲ δοκίμιον βελίον ἐστὶν παρόντος τοῦ βελιαντοῦ καὶ πύργου, ὁμοίως ἀναγνῆ βελιαντοῦ.*

(一一八) アリストテレースは有理的能力をば *ἐάντι, ἐπιτηδία* の如きものと解して *ἡσέβης, τροπαίας* であるとは言はない。私は全然之を無視するのではない。なるほど技術や知識は製作や観想に對する能力であるには違ひない。然し單に製作観想の能力たる限りに於ける技術や知識が兩方向的ではなく、他面兩方向的であつて欲求によつて決定を興へられるを要する限りに於てそれらは最早能力ではなく、受動的可能に墮すると言ふ事を指摘せねばならぬ。技術や知識の此兩面性に就ては尙後ほどに詳説する筈である。(未完)